



杉浦慶教

ほほえみグループ代表

ほほえみ選手名鑑

介護施設って、自分の人生を終える場所かもしれない。

そんな大切な場所だからこそ、
楽しい雰囲気を大切にしたいと思いませんか？

自分の家の隣が介護施設だったら、
TVアニメのサザエさん家とイササカさん家のように
仲良くお付き合いできますか？

「そりゃ理想的だけど、そんなのあり得ない」と思ったあなた。
「ほほえみ」は、そんなあなたにお勧めの介護施設です。
「ほほえみ」には、採蜜体験、井戸掘り、地蔵祭り、朝市、
などの楽しいイベントに、ご近所のボランティアさん
137名が気軽に遊びに来ています。

例えば、毎週水曜、木曜の夕方18時には、
施設の地域交流スペースで、近所の若いお母さんが
子ども達23人を対象に、そろばん教室を開いています。

介護施設の前では
子ども達のお迎えに来た若いお母さんたちが
井戸端会議をしています。

そんな、心温まる空間を「ほほえみグループ」は、提供します。



ほほえみプロジェクト「生きがい介護」の一環として、利用者
のリハビリと地域交流を兼ね、施設内に井戸を掘りました。
利用者、スタッフ、ボランティアと地域の子供達が一体となって
ひとつの井戸を掘り、皆で達成感を分かち合いました。

〒468-0012 名古屋市天白区向が丘4丁目1002番地
TEL 052-433-6111 <http://hohoemi33.co.jp>

Facebook

フェイスブックで「株式会社ほほえみ」
を検索して頂くか、右記のQRコード→
を読み取りアクセスしてください。



誰かが聞いた

名言集

杉浦慶教 (迷言)

- ② 次はポニーを狙ってます。
- ① サービスで人を泣かせたい！
- ③ 気持ちと仕組みが一致したとき、動く。
- ⑤ 施設を砂浜にする！
- ⑥ おじさんをナンパした。
- 町を300年かけて作り直す。

- ① サービス業における究極の目的とは、お客さんを泣かせるほど感動させること。それは介護福祉施設も同じだという代表の考えに共感します。入居者やそのご家族、はたまた従業員をいかに感動させ泣かせるか、いつも考えていると感じます／担当デザイナー談
- ② 以前「新しい施設で何がしたい？」と聞かれ「ポニーを飼いたい！」と私が冗談半分に答えたところ、真剣に考え込んでしまった社長。そのときは無理でしたが、社長はまだポニーを諦めていないようです／女性従業員談
- ③ いくら「介護業界を変えたい！」という情熱があっても、世の中が求めているときには成功しません。しかし法律の改正など、社会の潮目が変わるタイミングを見逃さなければ、多くの人から必要とされる事業が生まれると言っていました／社長の友人、会社経営者談
- ④ 理想に近い介護を行うためには、施設周辺に住む方々の協力が不可欠です。しかし町の在り方を変えるわけですから、これには時間がかかります。「自分一代では到底ムリです。最短でも300年はかかるな」と笑っていました／(株)ほほえみ人事担当談
- ⑤ また社長が変なことを言い出した…と半信半疑で様々な砂のサンプルを取り寄せた私は、後に「誰だってオムツの中で排泄したくないだろ？自分の足でトイレに行くために足を鍛えるんだ」と聞いて納得。代表の独特な発想にいつも驚かされます／男性従業員談
- ⑥ 数年前、杉浦社長に会う機会があってね。初対面なのに「うちで働きますか」と突然ナンパされて(笑)。もう六十歳近かったし、はじめはそんな気まぐれな社長に、社長の理念にすごく共感してね。地域社会との交流のために、ひと肌脱ぐことに決めたんです。／「寄り合い茶屋ひらばり」マスター談

その他の迷言は杉浦Blogでリアルタイムにご覧ください！

タイトル 『株式会社ほほえみ』の俺流！社長業

URL <http://blog.livedoor.jp/hohoemi2000/>



「介護業界を変える！」 質しさが育てた強い意志

ほほえみグループの代表をつとめる杉浦慶教。全国で難しいとされていた小規模多機能型施設の運営をいち早く成功させるなど、業界では知られた存在です。屈託のない笑顔がトレードマークの彼ですが、こう見えて苦勞人。今回はその知られざる一面をご紹介します。

原点

1969年生まれの杉浦は、幼いころから母と妹の3人暮らし。母は自宅で託児所を営んでいましたが、生活は苦しいものでした。収入は不安定で、いつどうなるとも知れない毎日。母は食事のたびに「次も食べられるか分からないから、今しっかり食べておきなさい」と幼い杉浦少年に話したといいます。厳しい環境の中で、彼の芯の強さは育まれました。社会人になっても仕事には恵まれず、貧しさは変わりませんでした。杉浦は息を殺してチャンスを待ちました。彼も母と同じく起業の道に進もうとしていたのです。そして、遂にその日はやってきました。

ターニングポイント

その日の朝刊の見出しには、こう書いてありました。「介護保険制度の運用スタート」。民間の介護事業はみんな未経験だから、今から一番がんばったやつが勝つ。これなら経営の素人でも戦える、そう考えたのです。

まず、現状を知るために老人介護施設を見学しました。そこで杉浦は生涯忘れることのできない光景を目の当たりにします。老人たちが、まるで製造ラインを流れる工業製品のように扱われていました。人としての扱いを受けないまま、この老人たちは一生を終えるのかと想像すると、胸がギュッと締めつけられるようでした。杉浦は「変えなくてはいけない、俺が介護業界を変える」と固く決心したのです。

目の前には未開拓の市場が広がっていて、大勢の老人たちが救いを待っています。杉浦の心は奮い立ちました。誰もが避ける困難な事業にも、果敢に飛び込んでいきました。失敗もたくさん経験しましたが、その分、成功もたくさん経験しました。

現在

事業が軌道に乗った現在、お金で不自由することはなくなりました。社員にお金で苦勞してほしくないという思いから、給与水準は同業他社に比べて高く設定しました。

しかし、介護の事業はまだ道半ば。「理想の介護や福祉を目指すなら、町自体を変えなければいけない」との考えから、今後はさらに地域に密着した介護サービスの拡充に努めたいと杉浦は話します。そしてスタッフと一緒に「いつか天白区はほほえみ区に変わるかもしれないね」なんて笑い合っています。

杉浦慶教 自筆年表

1969年 (0歳)	名古屋市に生を受ける。アポロ11号が月面に着陸した年。	
1974年 (5歳)	運動会のかけっこで、トップを走るもゴールが解らずみんなと連うゴールに突進。足は速かったが、おっちょこちょいな少年だった。	
1988年 (18歳)	新聞配達などで貯めたお金で、夜間の大学に入学。自力の下宿生活がスタート。	
1988年 (19歳)	下宿先から帰省すると、実家が更地に。生活苦から、母が何の相談もなく家を手放す。	
1989年 (20歳)	さまざまなバイトで能力を発揮。学生ながら高額な収入を得る。仕事に対する自信がつく。	
1992年 (23歳)	大手商社に就職し息巻くも、社会の洗礼を受け、数カ月で退職。このあと3年ひきこもる。	
1995年 (26歳)	結婚を機に再就職。メキメキ成績を上げるも、相変わらずの貧乏暮らし。「地震が起きたわけでもないのに天井が落ちる事件」発生。	
1999年 (30歳)	法改正で可能となったヘラクレスカブト虫の養殖に成功し、起業のための資金を捻出。「国の制度が変わる時が好機」という母の教えが功を奏す。	
2001年 (31歳)	有限会社ほほえみ設立。マンションの小さな一室からのスタート。	
2002年 (33歳)	「バーにんげん」のマスターに「君のラッキーナンバーは3だよ」と言われる。以降、迷った時は3にする。	
2003年 (34歳)	今やほほえみの事業に欠かせない竹内部長に出会う。資金ショート寸前の危機に遭遇。残高17万円の会社の通帳を見てショックを受ける。	
2006年 (37歳)	新しい介護施設の開設にあたり、役所に申請書類を提出。これが間髪を容れず、1分でも提出が遅れていたら今のほほえみは無い。同年、宮村係長と運命的な出会いを果たす。	
2007年 (38歳)	施設長ミーティングにてミミズを飼うことを提案。冷たい視線を浴びるも生ゴミが良質肥料となり、キュウリ大豊作。	
2008年 (39歳)	入居者と地域の交流を目的に、養蜂事業を始める。	
2009年 (40歳)	新卒1期生が企画した「地蔵祭り」にボランティア31名が参加。	
2010年 (41歳)	「男の生きがい介護」の一環として、井戸を掘る。	
2012年 (43歳)	社会福祉法人の認可が下りる。行政のバックアップを受けながら、地域に根差した新しい介護をつくるための新拠点として活動を始める。	
2018年 (48歳)	フランクインコヴァー社と契約締結。「7つの習慣 f o r グランエイジ」で地域コミュニティのパラダイムシフトを起こす。	